

浄土

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授承認雜誌)第三二五号
昭和四十九年一月二十五日印刷 昭和四十九年二月一日発行

第四十卷

第二号



1974
2

實正

甲寅春首錦洞



『專行信正』

林 錦 洞

(東京三田貞林寺住職・書家)

元祖上人が、さる時答えられたお言葉に、
「淫欲酒肉をもて不浄とせず、諸道の中には
知恵をもて清浄の、みなもととするなり」と
あります。

法界波瀾の底流に真実を見つめる知恵こそ
清浄の源ということでしょうか。書作する心
の根底にはやはりこの現実を見、且つ諦める
知恵が必要です。還愚に徹する為にも、一度
は通らねばならない関門なのでしょう。信解
行証の過程も亦この事を暗示しております。

淫欲酒肉も清浄と受けとれた時、本当に受
け難き人身を得た喜びがこみ上げて来るし、
称名正因の有り難さも、尊く頂けるものと思
います。この感動を書作上の心象として顕現
できるよう、精進を重ねて行きたいものです
だから「專行信正」が私の生活のすべてで
す。平生愛用するこの雅印にも專行信正と刻
してあります。助正二業を専ら行い、称名正
因の正槽を全うしたい願いが秘められている
からです。ちなみに蓮社号は、専蓮社行誓信
阿良性僧正錦洞政方（傍点政は正に通ず）で
あります。

二
月
号



目次

表紙「鬼の念仏」松濤達文画

手を合せる人はしあわせもの……………一田善寿(2)

私のすきな御法語

人の命は……………佐藤良智(5)

転重軽受の悦び……………岸覚勇(8)

法然上人霊場めぐり①誕生寺……………安居香山(12)

經典に聞くシリーズ①

仏説無量寿経卷上……………村瀬秀雄(16)

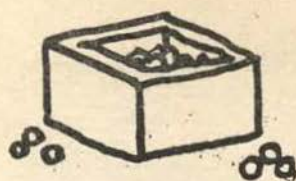
韓国のお寺……………小沢憲珠(22)

選訳集講話 未来永劫に流通する念仏……………佐藤成順(26)

「道」塩飽の島などへの道……………高橋良和(30)

浄土宗の宝物

阿弥陀如来二十五菩薩来迎図……………田中祥雄(32)



手を合せる人はしあわせもの

一田 善 寿

(牛 畝)

福岡市正定寺住職
浄土宗福岡教区長
福岡刑務所教諭師

五本の指は五濁の指と申します。罪惡を作るのはこの指でありまして、ペンを握れば文書偽造をします。刀を持てば人を殺します。五本の指を握りしめますと拳骨（げんこつ）となり喧嘩闘争の相（すがた）となります。然しながら拳骨の五本の指をバツと開いて両方の掌と掌とを合せますと合掌（がっしょう）の相となります。

私の心とみ仏の心が一処になった相であります。これを結縁（けちえん）と申します。仏と人とが縁を結んだ相であります。

仏と人が結ばれたことは結縁ですが、人と人が結ばれたことを交際とも申しつきあいとも申します。交際は人と人との利害関係が同じである場合は万事都合よくゆきますが、相反することになりますとつきあいが突き合いとなり殺し合いとなります。

念仏門の元祖法然上人は幼名を勢至丸さまと呼び保延七年（一一四一）九歳の春のころ父時国公は定明と云う心よくなき人より夜討をかけられ「決して恨んではいけないぞ、

恨は世にいつまで尽ることがない、武士の子として父の仇を討ちたいに相違ないが、それよりも早く出家して父の菩提を弔らうて下されよ、母を救うて下されよ、敵も救う有難い仏の道を見出して下されよ」と我が子である勢至丸さまに向つて「死んで行く父がこの通り掌を合せて頼みます、絶対に仇討ちするではないぞ」と濁々と流るる深手の傷を押えられていたその掌を合せて勢至丸さまと拝みつつ心ばかりは残れども残らぬものは玉の緒の合掌しつつ息絶えられたのであります。

母は亡き夫の、子は亡き父の最後の言葉を共に守り貫き、敵も味方も諸共に救済されることの出来る浄土宗の元祖となられたのであります。

曾我兄弟と法然上人をくらべますと父母の教訓に依り、同じ元祖でも仇討の元祖と念仏門の元祖との相違を知らされます。時国公の最後の言葉が「無念じゃ、残念じゃ、必らず仇を討ってくれ」と齒をかみしめつつ死んで

行かれたのであったなら、仇定明を闇の中に見出された時、小さいおもちゃの弓にて仇の眼を射抜かれたから、小矢児と呼ばれるようになられた位に弓矢の術に幼にして秀れた素質を持たれていたから、刃を磨けば仇討は容易に出来た筈であります。斯くすれば曾我兄弟の仇討が建久四年（一一九三）五月でありますから、曾我兄弟より五十年前に日本仇討の元祖となられたに違いない。

源頼朝が富士の裾野に於て巻狩をした時に曾我十郎祐成は第五郎時致と父河津三郎祐泰の仇なる工藤祐経を討ったのであります。これは兄十郎が九歳、弟五郎が七歳の時に死んで行く父は妻に向つて

二人の子供に必らず仇を討たせてくれと眼は虚空をにらみつつ無念の最後を遂げられたのであります。妻は夫の最後の言葉を実現すべく二人の子供に武芸を励ましたのであります。その甲斐あつて首尾よく仇討の本懐を遂げることが出来たのであります。

然しながら勢至丸さまの母は曾我の母の如く仇討教育をされなかった。祐泰は仇を恨んで死んで行ったが、時国は「我が討たれるは前世の宿業なり、仇を救ってくれよ」と四十三歳で死なれたことにより、父の齢の四十三歳の春、仇も味方も諸共に高嶺の月の仏性を開くことの出来ます浄土宗の元祖となられたのであります。

工藤祐経は河津祐泰を殺したので曾我兄弟に討たれたのであります。然し仇討をするこの出来た兄十郎は捕えられ、弟五郎も仁田四郎から組み伏せられ頼朝公の前に引き出され、工藤の子供から討ち殺され青葉を血潮に染めたのであります。折角仇を討つことが出来ましたが、跡は残った母は第五郎の骸に、兄十郎と恋仲であった虎御前はその骸に取り縋り泣き伏した其の相は何んと残酷なことか。聞くも涙で、この世ながら修羅道絵巻をくり抜いたのであります。法然上人は源平の戦に勝ちたるものも敗れたるものも、父も母も仇をも恩讐一体の浄土に導くことが出来たの

であります。

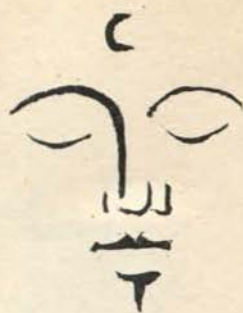
法然上人の父の教は合掌であり、曾我兄弟の父の教は拳骨を意味するものであります。平和と闘争の違いであります。

法然上人は念仏の元祖で掌を合せられ、曾我兄弟は仇討の元祖で掌に刃を握ったのであります。上人は平和を教え、よろこびを教えられたが兄弟は闘争を教え、悲しみを教えたのであります。

私は刃を捨てて合掌の人となつて下さいと教誨をつづけ、殊に死刑囚の皆さんには人をあやめたその罪惡の掌を合せて、先きだちし人を押んで下さい、その押んで称えたお念仏の功德にて殺した人を浄土に往生させることが出来ます。そしてお浄土で再会する時に押んで下さいましたことを喜ばれ、仇と仇と入ることが出来ますと共に木魚をたたき高らかにお念仏を申しつつ教誨を続けています。

涅槃会の仏顔なる死刑囚（牛軋）

私の好きな御法語



人の生命は

佐藤良智

(大正大学名誉教授)

入るべきなり」(勅傳)

「又云、人の命は食事の時、むせて死することも有なり。南無阿弥陀仏とかみて南無阿弥陀仏とのみ

私共は一面強い生命力にささえられていると同時に、きわめてもうい一面をもっているのです。もちろん、如来さまのおんいのち即ち、無量寿は強靱なものであります。しかしこの無量寿は言わば、生死を越えたおんいの

ちであります。いま上人が申されるのは日常の現象としての死です。もちろん私共の信仰によればこの死も無量寿のなかにつまれているものです。それはさておき、私どもの眼の前の生死は人間の現象としてはきわめて大きいものです。釈尊も生老病死の大きなあらわれにたいして、これをのりこえることをその修行の主眼とされた位であります。

生死の問題は人間のあるかぎりいつ迄もきえる問題ではありません。法然上人はこの大きな問題を淡々として食事にかこつけて私共にお示しになりました。一番安定した時、即ち、お食事の時にかこつけて死の問題を出されたのであります。一日のつとめが終り一家だんらんしている時にもふと死がおとづれてくることがある。それほど人生はきびしいものなのです。仏法では、死の縁無量なりと言っています。病気で死ぬことがあり、事故で死ぬことがあり、この事故もかぎりないものです。現代では自動車事故という恐しいものがあり、公害で一命を失うものも無数であります。都会では焼死などという恐ろしいものもあります。その他挙げればかぎりがあります。私共はそれを死の縁無量と言ったのであります。

言わば死にかこまれていると言ってもいいのです。あまり生きている人間はふれたがらないことですが、考えてみればきわめて大切な考えなければならぬ問題であります。念死念法などということばもあります。死をつきつめて考える時、初めて真理を考えることができるのです。上人は、「むせて死する」ことがあると淡々と申されていきますが意味は深いと思います。いのちがどのように大事なものであるかをつきつめて考えて居られる上人にして初めて日常茶飯時のことばの端に「生死一大事」が感じられているのであります。

わたくしのように老人の中に入るとこれまたこの縁が深いのであります。大したことのない道の高低につまづいてよろめいたり、ころんだりすることがあります。死の縁につながることをさえあと自誠しているのであります。若い人でも食事の時にむせて死ぬよう簡単に死んでしまうこともかぎりなくあるのです。

ガソリン問題が起る前には盛んに公害のことが言われました。そしていのちを大切にということばがボンボンと耳に入ってきました。宗教の時代がやってきたと私は思いました。どのような問題が地上に起きようといのち

を大切にということは永遠の問題であります。宗教につながる問題です。生死の問題は前にも述べましたように宗教の問題であります。

さて、つぎの御言葉であとですが、これがこの御言葉の宗教にかかわるものであると思います。

南無阿弥陀仏とかんで南無阿弥陀とのみこむということとはどういうことでしょうか。ことばは大変簡単で平易です。またことがらも至極平凡なことです。私どもは一日に二度三度御飯を頂いています。そして、何遍箸を口の中に入れることでしょうか。上人はその一かみ一かみに南無阿弥陀仏を申せと申して居られるのです。上人は死という大きな問題をからめ、その現実極めて平凡なことがらであります。命をかけた大きな仕事というようなものではありません。しかし食べるということは命を養うという大きな事柄です。しかし、重ねて言えば事柄としては何でもないので所謂日常茶飯事です。一杯のお茶をすることと同様です。喫茶店でコーヒーをすることと同様です。お茶にむせるということはないかもしれませんが、或はあるかも知れません。平凡に受取ればお食事作法とも思えます。しかし、私はそうとは思いません。

ん。上人はこのおことばを申された時は文字りの事柄であつたでありましょう。しかし、そもそも上人が浄土宗をお開きになった動機となつた支那の善導大師のおことばに、「行・住・坐・臥に一・生・懸・命・専ら念・仏を申しなさい。

これは仏様の本願であります」というのがあつてこれによつて上人は自分の道をきり開いて行かれたのであります。この大師のおことばにそつたそのままであります。歩いている時、立ちどまつてゐる時、すわつてゐる時、横になつてゐる時、この外に人間のありようはありません。寝てゐる時もあります。心が働いていませんからこれには入りません。このいつでも、無量寿（永遠のいのち）無量光（無限のひかり）にじかにふれる口に称える念仏を申しなさい。それは仏の本願によつてゐるからということ。本願とは一体何んでよう。仏典にはいろいろな本願が説かれています。お薬師さまという仏さまがあります。この仏は薬師本願經となつてあらわされていますが、お薬師さまはその文字が示しているように病氣をいやす仏さまです。この世から病氣が無くなつたらどんなにか幸福せでしょう。これをいやしてやろうという本願をたてられ自分が薬師如来となつて出現し



転重軽受の悦び

給うたのであります。本願が主体となっているのです。

現代のかぎりない医師たちは薬師如来の化身と言っているのではないのでしょうか。薬師如来を信じようと信じまいとこの本願のあらわれであると信じます。この仏は病氣だけにかぎられています、アミダ如来は、宇宙の太生命、無限の智慧の大明明のあらわれで居られます。そのみ名を称えることはそれと一体となることです。そしてその本願は外ではありません。このみ名を称え一体となることであります。しかも、行住坐臥でありますから一ときであります。一とき一ときみ名を称することです。一とき一ときが永遠の生命につながっているのです。これを弥陀に摂取されると専門語で言っています。その中に没入するということです。一とき、一とき

が大きいのちに生かされているということ。また、生きなければならぬということ。光明（ひかり）も同じです。このみ仏のひかりは太陽があまねく光っていると同様いつでもどこでも光っているのです。この智慧のみ光りに摂取されているのです。没入しているのです。不捨といって何物もすてないのです。特に念仏するものは捨て給わないのです。捨てられないように心をむけていなければならないのです。

それが信仰です。信ずることは大きな智慧ですが知識ではありません。これで南無阿弥陀仏とかんで南無阿弥陀仏とのみこむわけがおわかりになったと思います。どのような行いもこれです。ものを作る人は、売る人は、学ぶ人は、画をかく人は。かぎりありません。

岸 覺 勇

(四日市市六呂見町観音寺住職)

「仏の御ちからは、念仏を信する

ものをば、転重軽受といひて、宿

業かぎりありて、をもくうくべき

やまひを、かろくうけさせ給ふ」

これは元祖法然上人の数ある御法語の中で、現在の私にとつて尤も有難く感ずる転重軽受の悦びのそれであります。この御法語は念仏を申す者はたとい病氣になつても、本来ならばもっとひどい病を受くべきところを、この程度の軽さに受けさせて頂いたのは有難いことだと悦べとのお示しであります。

病氣と云えば誰れでもないやなこと、悲しむことでありますが、念仏を唱うる人は、そのような逆境の場合にも猶悦べる道があるとお論しきとであります。

わたくしはこの「転重軽受の悦び」の御法語をただ病

氣の時に限らず、人生に於ける凡べての苦難に遭遇した時にも味うべきお論しと受取っています。

躓つまずいて倒れて怪我した時も、自分の宿業によれば、もっと大きな怪我をし、時には命をも失うようなこともあったかも知れぬのに、この程度の傷ですんだことは、阿弥陀さまの御慈悲の御陰であつたと悦べば、普通の人なれば怪我して悲しむような時にも、われら念仏者は猶悦ぶことができるわけであります。

○ 念仏の篤信者を妙好人と云いますが、この語源は観經の「若し念仏する者は人中の好人、人中の妙好人、人中の善導大師が散善義に「人中の好人、人中の妙好人、人中の上上人、人中の希有人、人中の最勝人」と訳されたに始まると思うのですが、この妙好人と云われた念仏者たちは、みな不幸や逆境に遇う時と、いつもこの転重軽受の悦びを感じた人々でした。

○ 大和の清九郎という妙好人は、ある意地悪の馬方に、

今宵はわが家で七時から京都から来て頂いた布教師さまの御説話があるから、是非参つて呉れよと誘われ、律義な清九郎はその夜は雪の降りしきっている寒い寒い晩だったが、その馬方の家へ行ってみると雨戸はピンと閉ざされ、人の気配もない。まだ時間が早かったのかと軒下にただずんで、念仏しながら待っていたが、いつまで経っても戸を開けて呉れぬ。二時間ほど経ってから清九郎が独り言を云うのに、「ああ今日はわしが日を間違えたか、馬方さんにたまされたか知らぬが、とにかく馬方さんの誘いの御陰でこの家の軒下、雪の降る中で、二時間もお念仏することが出来たのは、全く阿弥陀さまの御慈悲の御方便であつたか」と、大いに悦んだとの事であります。

○ 阿弥陀仏は光明名号摂化十方と云われる如く、身より放ち給う無量無辺の光明を以て、われら念仏者を照して「三垢消滅」と、慾、腹立ち、愚痴の煩惱を除いて、清らかな、喜ばしい、明るい心と換えて下さるのであります。

われら凡夫が腹立つことがあって、顔を真赤にし、口

を尖らせ、身を振るわせて人を揉もよらんとする時でも、南無阿弥陀仏のお念仏が唱えらるれば、阿弥陀さまは歓喜光を以て照し給ひ、腹立ちの心を除いて喜びの心に変えて下さるのであります。

瞋恚の焰 燃え盛る心に弥陀を念ずれば

怒りはいつしか消え失せて歓喜の心に変るなり
とは、その事を詠じたものであります。

○ わたくし自身のことを書いて汗顔の至りですが、自ら体験した事実を語ってみたいと思います。わたくしは今次の大東亜戦争に支那大陸に渡り、中支、北支に二九年ほど転戦しました。中支の戦線にあった時、忘れもせぬ昭和二十年正月元日、真夜中の一時頃忽かにかん高き敵襲の聲に全員がガバツと飛び起き、まっくら闇の中で軍装を整えて二百人の一個大隊の兵が、水田の間の細い道を雪がせつせつと降るぬかるみの中、夜の行軍をいたしました。わたくしは大隊本部付の将校として従軍していましたが、大隊砲、機関銃等を初め二百名の兵の通つたあとの道を通つた時、雪でぬかるみになったので、ツルツとすべつて水田の中へ顛落しました。幸いすぐに起き上る

ことは出来ましたが、体はずぶぬれ、水が体にしみ込み、寒さに身振っていました。

その時、わたくしは愚痴の心に襲われました。「わしは何という運の悪い男だろう。私と同年輩の者は年四十歳になっているから召集されることもないのに、自分は生じつか一年志願などしたから、今こんな辛い目にあっているのだ。全く貧乏籤を引いたものだ」と愚痴が出ました。而しわたしは浄土宗の僧侶の御陰で、そういう愚痴の心の中からも、思わず知らず南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏とお念仏が出ました。そうすると不思議やその愚痴の心はいっしょか消えて、却って悦びの心と変わりました。

それは自分ながらも全く不思議でなりませんでした。

愚痴の真闇の中からも 南無阿弥陀仏を唱うれば

如来の光明輝きて 明るき心と甦える

とは、私のその時の実感でした。

わたくしが苦しみまぎれに念仏すると、わたくしの心の持方がすっかり変わりました。そしてどこからか、阿弥陀さまのみ声が聞えて来るように「お前は今この戦場に在りながら、内地のことを思ったり、寺や家族、子供のことなど思いながら、うかうかと行軍しているが、ここ

は戦場だ、いつ何時千仞の谷に落ちて死ぬやら、敵軍にねらい打ちされて殺されるやらわからぬから注意せよ」と、阿弥陀さまが命に別条のない水田にころがせて教えて下さったのだと思うと、忽ち有難くなり、阿弥陀さまの大慈悲の広大なるのに感謝し、歌など作ったこともない私に、拙き一句が思わず口からほどばしり出しました。願^{ねが}ひかけて倒るも嬉しみ教と 如来大悲に涙するかな
というのでしたが、三十余年経った今も猶時折り、その当時のことが思われて、阿弥陀さまの大慈悲の転重軽受の悦に涙します。

人の世渡りには、その時その時いろいろの苦難に遭うものであります。之は苦しい、之は辛いと思う時、広く世間を見渡して見ると、自分よりも、もっと、もっと苦難の道を進んでいる気の毒な人たちがあつたのを見出しませう。あの人たちのことを思えば、まだまだ自分は恵まれているのだ、阿弥陀さまのお守りに預っているのだと思えば、苦難の中にも「悦び」の心が沸いて来ます。

そうすれば苦しい中にも猶「悦ぶ」ことが来ます。これが法然上人の転重軽受の悦びのみ教であるうかと、受け取らして頂いている次第であります。

法然上人靈場めぐり

第一回



寺 生 誕

山 香 居 安

今回より登場する宗祖法然上人二十五霊場めぐりには、総本山知恩院が、浄土開宗八百年記念事業の一環として依頼し、馬堀喜好画伯が精魂をこめて書きあげた、各霊場ごとの画幅を掲載する機会を得た。この掲載にご快諾いただいた知恩院当局に感謝すると共に、毎月登場する各霊場の画幅にご期待下さい。

岡山から津山線で津山に向って行くと、約六〇分程で誕生寺駅に着く。野原の中の田舎駅であるが、これが法然上人ご生誕の地への着駅である。寺の名がそのまま駅の名になっていることで分るように、この地方を代表する名利となっている。

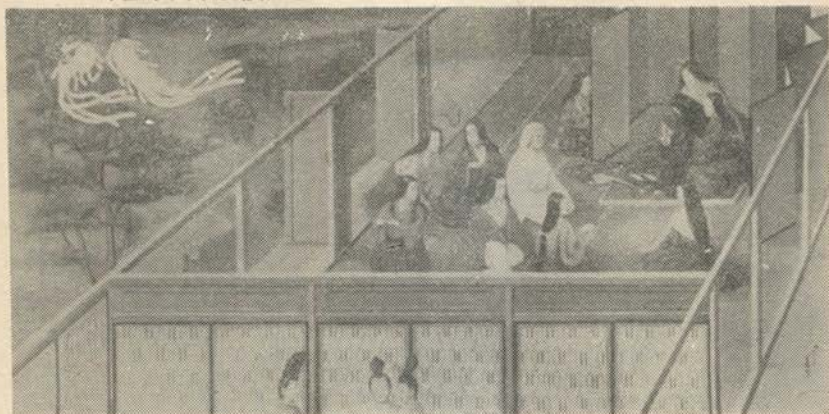
駅を降りて四方を見廻すと、豪壮な七堂伽藍が森の中に見えて、あれが誕生寺だなど一目で分る。駅から寺まで十数分もかかったであろうか。もう大分前になるが、私は初めて祖師誕生の地に足を踏み入れて、いい知れぬ感激にしたったことを、今でも覚えている。

縁起によると、建久四年(一一九三)、熊谷蓮生坊が、法然上人の命を受けて、この地に来て、上人誕生の旧邸を、寺に

〈第一番〉 誕生寺

浄土宗開宗慶讃記念

(馬堀喜好画)



法然上人誕生の地と年少の頃過された図

一知恩院所蔵一

改めたものであるという。いうまでもなく、円光大師廿五霊場の第一番に相当する寺である。

上人は、長承二年（一一三三）四月七日、古い呼び方では、美作国、久米南条、稻岡庄で漆間時国の長子として、この地に誕生された。今日でもこの地名を受けて、久米郡久米南町となっている。

上人ご生誕の時、空から二流れの白幡がまい降りてきて、屋敷内の椋の木にかかったと、勅修御伝に書かれているが、今も境内に大きな椋の木がそびえたっている。勿論何代目かの椋かと思われるが、感慨も又新たである。

両幅の 天降ります 椋の木は

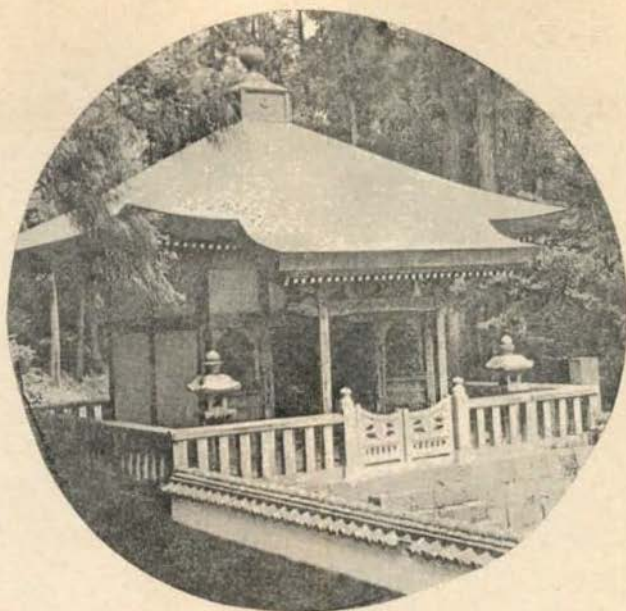
世々に朽ちせぬ 法の師の跡

熊谷蓮生房の歌とされる歌が、伝えられている。

この寺の中心は、知恩院と同様に、御影堂という。普通の寺の本堂に相当するものであるが、法然上人の御像をお祀りしていることから、御影堂という。重層の華麗な建物で、現在のは元禄九年（一六九五）三回目の建造物であるが、いかにも上人生誕の地にふさわしい御堂である。

住職は同様漆間姓を名のっておられるが、上人の御生家と家系的には繋がりはないということである。ちょうど私が訪れたときは、仏専時代の友人漆間坤爾師が代務しておられ、

法然上人御両親御廟（二七七九再建）



したしく寺内を参詣することができた。祖師像は、特に目のあたりに拝み、その偉徳をしのんだ。境内には、上人の御両親の御廟もあり、いかにも上人生誕の地を偲ばせて、去り難

い。上人の産湯の井戸などと名づけられた井戸もあり、何もかもがあやかってみたいものばかりである。

裏手には小さな川が流れているが、ここに片目の魚がいて、この川を片目川といっている。なんでも上人が勢至丸といっていた九歳の時、明石源内武者定明の夜襲を受けたことがあった。上人の父はこの時の深手がもとで、終にこの世を去られるのであるが、この時、勢至丸は柱かけから小弓で定明を射たところ、矢が右目にあたった。その定明が逃げるとき、この川で目を洗ったところ、片目の魚ができたそうである。今でもいるそうであるが、泳いでいるのは見当らなかった。宝物館に入ったところ、瓶詰めのが置いてあった。事の真実はとも角として、何事も上人にあやかりたいと思う末流の気持ちには、こんなことにも、心ひかれるものである。

上人の父はこの深手がもとで、この世を去られるのであるが、「仇討ちをせずに、わが菩提をとぶらえ」という遺言忘れがたく、終に出家の道を辿られて、庶民救済の浄土念仏法門を開かれたもので、夜討ちはまさに仏縁であったわけである。この地に上人の邸宅があり、そこで子供の頃の上人が遊び廻っておられたと思うと、一木一草のみならず、この土地の砂の一粒にも、上人の足跡が感ぜられて、感激ひとしおである。

聖地というものは、その意味で尊いものであり、そしてこ

の感慨は、その信仰の流れを汲んでいるものでなければならぬものである。かつてルナンは、クリストの伝記を、クリストの歩んだ足跡を、自からも踏みしめながら書き綴った。そこには歴史的考証以上のものが、一句一句ににじみ出ていて、生きたクリスト伝となっている。法然上人にもいろいろ



山門



会式法要

(25菩薩練供養毎年4月19日に奉修されている)

大型バスが毎日のように出入りしている。いつまでも尽きない念仏法門の象徴のように、この寺はいよいよ莊厳にそのいらかを輝かせている。

な伝記があるが、上人の生誕の地から始めて、迎られた通りの道筋を追体験しながら、綴られた伝記に未だ接していない。何時の時か、そうしたものも生れてくるに違いない。

ここでは毎年四月十九日、会式法要が盛大に行われる。これは上人の御両親を追恩して、二十五菩薩天童迎接練供養が行われるので、古く元禄十二年から毎年行われているという。現在は岡山県の県文化財民俗資料に指定され、当日は全国から数万の参詣人があつて賑わう。開宗八百年を迎えた今年は、さぞ盛大なことであろうが、昨年ごろから、開宗八百年を迎えての団体参拝が絶えず、



仏説無量寿經

卷上(第一回)

村瀬 秀雄

|| 經典に聞くシリーズ ||

一 はじめに

我聞如^レ是。一時仏住三王舎城耆闍崛

山中、与二大比丘衆万二千一俱。一

切大聖神通已達。

われ聞きき、かくの如きを。一時、ほとけは王舎城の耆闍崛山の中にましまして、大比丘衆万二千人ともなりき。一切の大聖は神通すでに達せり。

(意訳) 「私はこのような教えを釈尊から聞きました」と、

多聞第一の阿難はこの經典がまさしく仏説であることを証言する。阿難は釈尊がこの經典をお説きになるについて、その話相手に選ばれたのである。

ある時、釈尊は王舎城の東北にそびえる耆闍崛山(靈鷲山)におられ、一万二千人のお弟子を前にして、この經典をお説きになった。このお弟子たちはすべての行動が自由自在であったし、他人の心を見抜くという神通力をもった勝れた聖者ばかりであった。

(なおその中には普賢、文殊、弥勒の三菩薩を初めとして在家の菩薩たち、出家の菩薩たちがいた。また十大弟子や五比丘たちの尊者がいた。お弟子たちはいずれも仏になるための修行目標をもち、その成就を願って修行と徳行を積んでいたのである。)

二 菩薩の修行のすがた

具三諸菩薩無量行願一、安住一切功

徳之法一。遊二步十方二行三檀方便一、

入三仏法藏一究二竟彼岸一。於三無量世

界二現レ成二等覺一。

もろもろの菩薩の無量の行願を具して、一切功徳の法に安住せり。十方に遊歩して檀方便を行じ、仏法蔵に入りて彼岸を究竟す。無量の世界において等覺を成ずることを現す。

(意訳) 菩薩たちは菩薩としてなすべき多くの修行を積んでいた。この修行は仏となるための願いを成就するために行うものであって布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の行に励み、それによって仏の世界に到達しようとするものであった。仏の教えはあらゆる功徳をもつから、菩薩たちは仏の教えの中にあつて身も心も安んじていた。またあらゆる世界に赴いて人々を教化するに当つては、人々の能力や境遇に応じ

て適切な教化を行うために仮に方便を用いたのであった。このように菩薩たちは仏の悟りを悟り、迷いの世界を超えた世界に到達していた。このように菩薩たちはあらゆる世界において釈尊と同じく悟り、釈尊と同じく人々の救済に努めていた。

(このことは菩薩の生い立ちからみても釈尊とよく似ていた。もともと菩薩は兜率天にいて法を弘めていたのであるが、そこを捨てて人間界に生れ、七歩を歩んで悟りを開き人々を救済するという決意を示した。やがて長ずるに従い身体を鍛え、勉強にいそしみ、家庭をもつようになった。しかし老病死という世の無常を知つて修行の道に入り、初めの苦しい修行をやめて菩提樹の下で冥想に入った。ここにおいて多くの魔軍を制して悟りをひらき、人々に法の妙薬を与え、これによって心身の苦に悩む人々を救うのであった。)

三 慈悲心から人々を哀れむ

遊二諸仏国一普現二道教一、其所レ修

行清淨無レ穢。譬如幻師現二衆異

像一、為レ男為レ女無二所不レ變、本

学明了在中意所為上。此諸菩薩亦復

如レ是。学二一切法一貫綜縷練、所

住安諦離レ不レ致レ化。無數仏土皆

悉普現、未二曾慢恣一惑二傷衆生一。

如レ是之法一切具足。

諸仏の国に遊んであまねく道教を現じ、その修するところの行は清淨にして穢れなし。たとえば幻師のもろもろの異像を現ずるに、男をなし女をなして所として變ぜずということなく、本学明了にしてこころの所為にあるがごとし。このもろもろの菩薩もまたまたかくのごとし。一切の法を学して貫綜縷練し、所住安諦にして化を致さずということなし。無數の

弘土にみなことごとく、あまねく現するにいまだかつて慢恣せずして衆生を慰傷す。かくのごときの法の一切を具足せり。

(意訳) 菩薩は諸仏の国々に赴いて釈尊の教えを實踐したが、その修行は清淨であつて少しの穢れもなかった。これを例えていうならば幻術師が様々な姿に変身して人々を救済することに似ている。幻術師は時と場合によってあるいは男の姿となり、あるいは女の姿となる等して思いのままに姿を変え、それでいて自分の学問を明確に身につけているから、本来の目的を間違ひなく果すのである。これと同じように菩薩もまたこの国に赴いても衆生救済の目的を果している。更にまた菩薩は仏法を学ぶのに十分な研究をつくり、身心ともに安らかな状態にあつたから、どんな時でも十分な教化ができるのであつた。こうして菩薩は無數の仏の国に赴いて教化するのであつたが、その教化に當つていまだかつて高慢な心を起したことがなく、いつも慈悲の心をもって人々を哀れむのであつた。このように菩薩は、人々を救済する方法を完全に身につけていた。

四 辨才智によって教化する

宣二暢演三說一切經典一。住二深定

門二悉覩二現在無量諸仏一、一念之

頃無レ不二周徧一、濟二諸劇難諸閑不

閑一、分二別顯三示真実之際一、得二

諸如来弁才之智一。入二衆言音一開二

化一切一

一切の經典を宣暢し演説す。深定門に住して現在の無量の諸仏をみたてまつり、一念のあいだに周徧せずということなし。もろもろの劇難と諸閑と不閑とをすくい、真実の際を分別し顯示するに、もろもろの如来の弁才の智をえたり。もろもろの言音をさとりてし一切を開化す。

(意識) 菩薩はすべての經典について流暢な言葉をもって人々に説き明していた。また菩薩は深い精神統一の状態にあり、心を静めて専念していたので、そこにいるすべての仏たちをみ奉ることができたし、短い間のうちにあらゆる仏の国をめぐることができた。あるいはまた地獄、餓鬼、畜生の世

界にあつて劇しく苦しんでいるもの、仏道を修行しているもの、修行に堪えないもの等のすべてを救いあげていた。それというのも仏の真実の道を十分に理解していて、人々に明確に示すことができたからである。仏の教えについて滞ることなく知り、意味内容を完全に理解し、諸方の言葉に明るいので、人々に自由に説法できるという弁才智を持っていた。こうして菩薩はいろいろの言語を通じていたから、それによって一切の人々を導き救済できたのである。

五 菩薩は不請の友となる

超二過世間諸所有法一、心常諦二住度

世之道一。於二一切万物二而隨レ意自

在。為二諸庶類二作二不請之友一、荷二

負群生一為二之重担一。受二持如来甚

深法藏一、護二仏種性二常使レ不レ絶。

興二大慈一愍二衆生一、演二慈弁二授二

法眼一、杜三趣二開三善門一、以三不

請之法二施三諸黎庶一、如三純孝之子

愛三敬父母一、於三諸衆生二視若二自

己一。一切善本皆度二彼岸一、悉獲二

諸仏無量功德一、智慧聖明不レ可三思

議一、如レ是之等菩薩大士不レ可稱

計一。一時來會。

世間のものものあらゆる法を超過して、心は常に度世の道に諦住す。一切の万物においてここに随いて自在なり。ものもの庶類のために不請の友となり。群生を荷負してこれを重担とす。如来の甚深の法蔵を受持し、仏種性をまもりて常に絶えざらしむ。大悲をおこして衆生をあわれみ、慈弁をのべて法眼を授け、三趣をふさぎ善門を開き、不請の法をもつてもものものらしい庶にほどこす。純孝の子の父母を愛敬するがごとし。ものもの衆生においてみること自己のごと

し。一切の善本はみな彼岸にいたる。ことごとく諸仏の無量の功德をえたり。智慧の聖明なることは思議すべからず。かくのごとき等の菩薩大士は称計すべからず。一時に來會せり。

(意訳) 菩薩は世間のすべての迷いの法を越え、心は常に悟りの道に安住していた。一切のものをすべて思いのままに自由にすることができた。また多くの人々のためには慈悲心から求められる前に、こちらから進んで真実の友となり、人々の苦を取り除くことこそ己れが負うべき責任であるとしていた。仏の深遠な教えをよく保ち、人々が将来に仏となるために必要な素質である種子を絶やさぬようにしていた。慈悲の心をおこして人々を哀み、情けのこもった言葉をもって法を説き、諸法を觀する目を開かせた。こうして地獄、餓鬼、畜生の惡道におちる道をふさぎ、仏に通ずる門を開き、相手から求められる前に仏の教えを人々に施した。これはあだかも親孝行の子が父母を敬愛する様子に似ていた。だからすべての人々に関することを我が身のこととしていたわっていた。菩薩の修める善根功德は何れも人々を悟りの世界に導いていた。菩薩は仏と同じように無量の功德をもっていたのである。その智慧は測り知れない位に尊く清いものであった。こ

のように勝れた菩薩聖衆たちは数知れず多くいて、みな耆闍崛山（靈鷲山）に集まって説法の座に列っていた。

六 阿難に教えを説く

阿難当レ知。如来正覺其智難レ量多レ

所二導御一。慧見無礙無二能遇絶一。

以二一滄之力一能住二寿命一、億百千

劫無數無量復過二於此一。諸根悦予

不二以毀損一。姿色不変光顔無レ異。

所以者何如来定慧究暢無レ極。於二一

切法一而得二自在一。阿難諦聽。今

為レ汝説。対日唯然願樂欲レ聞。

「阿難まさに知るべし。如来の正覺はその智はかり難く導御するところ多し。慧見は無礙にしてよくあつ絶することな

し。一さんの力をもつてよく寿命を住することは億百千劫無量にして、またこれに過ぎたり。諸根は悦予してもつて毀損せず。姿色は不変にして光顔ことなることなし。ゆえはいかん。如来の定慧は究暢して極まりなし。一切の法において自在をえたり。阿難あきらかに聴け。いま汝のために説かん。対えてもうさく、「唯しかり。願樂すらく聞きたてまらんと欲す」

（意訳） 釈尊はいわれた。「阿難よ。よく知らなくてはならぬ。如来の悟りの智慧は深くて容易に知ることができないが、それによつて多くの人々を導き救済している。この智慧に對して邪魔だてするものがなく、止めたり絶やすことができない。如来は一回の食事をとつただけで寿命を保つことができ、寿命の長さは無限に等しい期間に及ぶ。それでいて如来の身体は少しも損われず、容姿も変らず、お顔の光りも衰えない。その理由は何かといえ、如来は禪定と智慧とを極めてつくして、一切のものを自由自在にする力があるからである。阿難よ、あきらかに聞け。今から汝等のためにこの經典を説くであらう」。阿難は答えていった。「それこそ私が願ひ望むところであります。謹んでご説法を拝聴いたします」

韓 国 の お 寺



普門寺の山門（ソウル）

小 沢 憲 珠

（八王子市在住）

もう三カ月も前になるが、昨年（一九九〇年）の十一月の初旬に八日間程、韓国を訪れる機会を得た。大正大学とソウルにある東国大学との間で、仏教の学術交流セミナーが開かれ、幸いにそのメンバーの一員に加わることができた。

韓国の仏教にも日本と同様にいろいろな宗派があつて、その主流をなすのは曹溪宗といい、禪宗の系統である。その法燈は日本よりもずっと古く、日本の兄貴分ともいえる。東国大学はその曹溪宗の宗立の大学で、仏教学部の外に文学部や経済学部等もある総合大学である。おそらく一万人近い学生がそこに学んでいるのだろう。校庭の真中にお釈迦様の立像がまつてあつて、いつも何人かの学生がその前で合掌をし、読経しているのが印象的だった。

ゼミに前後して私達はいくつかの曹溪宗の仏教寺院に参拝した。羽田から空路二時間余でソウルに着くともう昼近くであった。よく晴れていたが十一月というのに東京の十二月位の氣候で、風が冷たかった。紅葉の時期も過ぎており、街路樹の葉も半分はなかった。韓国は大陸性の氣候で、三寒四温といって三日は寒い日が続くが四日は温いということだそうである。空港からソウル市内の普門寺に案内された。このお寺は尼寺である。ここには慶州にある有名な石窟庵の模造があり、白い石像の仏様のお顔はおだやかで、私達が普段日本で接している仏様となんの違和感もない。

参拝する信者たちは五体投地の礼拝を三返し熱心にお祈りしていた。私達一同も般若心経を唱えた。韓国のお寺ではどこへ行っても、出家者も在家の信者も仏様の前では先ず五体投地をする作法がみられ、しかもごく自然に身についた行儀であった。

この普門寺にはたくさんさんの尼僧さんがいるが、その一人は現在大正大学に在学している。そんなお蔭もあって、私達は昼食をごちそうになった。広い境内の一角にある宿坊の一室にはすでに食卓が用意され、ごちそうが並べてあった。韓国を訪れて初めての食事である。しかもお寺の料理である。私達はお坊さんの日常生活に興味があった。食生活もその一つ

である。食事にはたくさんのお皿が並べられ、ほうれん草、もやし、海草、おもち、せんべい等がそれぞれに盛られてある。それに麦飯にみそ汁にキムチであった。肉類はなく、いわゆる精進料理である。合掌をして有難く頂戴した。上手に料理されており味付もよくおいしくいただくことができた。遠来のお客のために品数も多かったにちがいない。

お寺の料理は原則として自給自足だという。大きなお寺の寺領には必ず田畑があって、お坊さんたち自らがくわを持って野菜などを栽培するそうである。そういえば普門寺の山門を入ると僧服の尼さんや手伝いの婦人方が忙しそうに収穫があったのであろう白菜や大根を束ねたり、ほしたりしていた。ちょうどキムチをつける時期でもあった。それが日課の一つであるという。男性の坊さんの顔はたくましく日焼けしている。私達の食事にあがったのもそれらの一部である。尼僧さんたちが心をこめて調理して下さったものである。男性の寺とちがって、やはり女性らしい心遣いがみられた。野菜類をあまくしたり、からくしたり、ごまであえたり、また穀類をおもちにしたり、お菓子風にしたり、とりどりである。韓国料理は普通、とうがらしをふんだんに、又にんにくその他の香辛料が入って独特の香りがあって、日本人の口にはなかなか合わないものが多い。しかし寺の料理だけは肉魚の入

らない精進料理でこそあれ、くさみのあるものは使ってなくて、おいしいものばかりであった。ただとうがらしだけはどこのお寺でも使っており、みそ汁の表面に赤くういている。

私達はこうして昼食をこちそうになると、厚いもてなしに感謝しつつ、最初に訪れたお寺を後にした。そして最初に憶えた韓国語はカンサハムニダ（ありがとう）でした。

男性の寺、海印寺にも参拝した。韓国ではヘー（海）イン（印）サー（寺）と発音する。ソウルから高速道路をバスで六時間程南下したところにある。中学や高校の修学旅行でもよく行くところである。奥深い山中にあり韓国有数の大寺院である。韓国のお寺は、仏の寺、法の寺、僧の寺というように仏法僧の三宝によってそれぞれ特色づけられるが、海印寺は法の寺といわれている。寺名の由来は華嚴經に説かれる海印三昧という。そこには八万大藏經と呼ばれる高麗版大藏經の版木を収めてある国宝の経蔵がある。

私達が海印寺に到着した時はもう日が暮れかかっていて寒気が身をつつんだ。今夜はここにとめていただくことになっている。宿坊に荷物をおくとさっそく夕べの勤行に参列するために本堂に向った。宿舎から十分程山路を歩いたところにある。懐中電燈で足下をてらしながら歩く。本堂は大寂光殿といい、本尊は毘盧舎那仏である。本堂に向い合っている山

門には大きな太鼓がおいであり、お坊さんたちが交互にこれを打ち鳴らし、勤行のあいずを境内にひびかせていた。寒さと暗闇の中のそのひびきは山内をふるわせ、またそれは打ち鳴すもの自身のこれからの厳しい修行に向うときの気合であり、武者ぶるいでもあるようにも感じる。

本堂に入るとすでに三十人程の坊さんたちが仏前に向って静かに坐禅をくんでいた。私達も最後列に静坐した。坊さんたちも順次入堂して仏前に三礼して席につく。静まりかえった広い堂内もいつのまにかいっばいになり、維那の発声で勤行が始まる。お経はもちろん韓国語の発音で読むから私達にはわからないが、最初は仏名を唱えては礼拝をする行である。誦経は般若心経である。ボンボンボンボンと木魚が入ると、そのテンポに合わせて全員が「摩訶訶般若」とつづく。日本の木魚は下においてボクボクとたたくが、韓国の木魚は手に持つようにできていて、木の棒でたたく。だからその音は、ボンボンとひびく。勤行は意外に早く終わった。坊さんたちはその後、それぞれの宿坊にひきあげてお経の練習や坐禅をする。私達は読みなれた発音でもう一度般若心経を唱えた。

宿舎にもどって坊さんたちの作って下さった晩ごはんをこちそうになった。しいたけの煮物は海印寺では特別のごちそうということで、私達をもてなしてくれた。しかし明朝の勤



行がひかえているので早めに就寝しなくてはならない。午前三時起床、三時半の開始である。

戸外はやけに寒い。実はここに来るまでお寺の暖房のことが気になっていた。朝には霜がおり、

雪の降るのも真近である。各寺院の本堂は日本と同じで畳もあれば、板ばりの床もある。海印寺は畳であったが、火の気はない。だが山内にいくつもある宿坊にはオンドルが備っていた。床下で火をたくのである。一般民家の暖房も全部オンドルである。

以前は燃料に薪が使われたが、今は煉炭であ

る。床下にたき口があって煙を通すから、床はぶ厚い石でできており、その上に油紙が張ってある。じかにすわるとお尻から暖ってくる。外気との遮断が障子一枚でも部屋の中はほんのりと暖ったかい。お坊さんが坐禅をくむのも、寝るのもこういう部屋である。だから真冬の火の気のない日本の禅寺よりも過しやすいかもしれない。石油ストーブをたいて坐禅をくんでいるお寺もあった。私達がとめていただいた部屋もこういうところだった。

朝三時、体が芯まで暖った頃、お坊さんが経文を唱え木魚をたたきながら各宿坊をまわってくる。起床を告げる目覚し時計である。氷るようなわき水で顔を洗うと一べんに目が覚めた。夕べ歩いた山路を再び本堂に向う。朝の勤行が終ると体は芯まで冷えきっていた。あたりはまだ暗い。お坊さんたちは又各自の宿坊にもどってお経の練習や坐禅に、あるものは朝食の仕度、一日の活動が始まる。私達は朝食の時間まで仮眠をとることにした。

短時間ではあったがいくつかの寺院に参拝できた喜びは大きい。真剣に仏道に励むお坊さんが大勢いる。仏様も親しみやすい。大きな伽藍は日本の奈良朝のそれを思わせ、日本仏教の故郷がそこにあるように思われた。

選釋集講詠

第十二章 付属仏名篇

未来永劫に流通する念仏

佐藤成順

(大正大学講師)

この章は、付属念仏章とも、付属章とも、あるいは念仏諸行廃立篇ともいいます。一章の内容は、題名のとおり、釈尊が、さまざまな仏教の実践行のなかから、ただ一つ念仏のみを選びとって、弟子の阿難に授け、未来永劫に伝え残した、念仏こそ未来永劫に流通せらるべき教である、という趣旨を説いています。

經典では、一般的に、その經典で説いた勝れた教えをいかにして世のなかに流通させ、さらに、末代に伝え残すか、ということに注意がはられています。教えを流传させるために、釈尊は適当な弟子に教えを付属するのです。釈尊が法を説いた目的は、世のなかの人々を救い導びくためにほかなり

ません。いかに勝れた教えであっても世の人々の心のなかに伝わらなければ、せっかくの教えも生きてきません。經典の末尾に流通文とか囑累品とか呼ばれる教の流通の仕方を説き示した一節が設けられているのはそのためです。それは經典の一番おわりの、經典全体から見ればごくわずかの部分に過ぎませんが、釈尊が教えを説かれた目的を考えると、その短い流通文に、釈尊の説教の目的が秘められていて、非常に重要な意味をもっていることがわかります。

法然上人は、そうした釈尊の説教の目的と、經典の性格を念頭において、それにそって、念仏こそ釈尊が末代に伝えんとした教えにほかならない、と釈尊の真意を汲みとっている

のです。

この章の構成と説述のはこびかたは、初頭に、つぎの『観經』の經文を挙げて、釈尊が念仏一行の姿を弟子に付属し、末代に流通を図ったという考えの典拠にしています。

『観無量壽經』に云わく、仏、阿難に告げたまわく、
汝、よくこの語を持って、この語を持ってとは、すなわち無量壽仏の名を持ってとなり。

つづいて、善導大師の『観經疏』を引用し、善導大師を指南としてこの經文を理解しています。

同經の疏に云わく、『仏、阿難に告げたまわく、汝、よくこの語を持って』より以下は、まさしく弥陀の名号を付属して、廻代に流通することを明かす。上來定散兩門の益を説くといえども、仏の本願に望むれば、意樂生をして一向に専ら弥陀仏の名を称せしむるにあり。

『観經』には、定善・散善の諸行が説かれているが、阿彌陀仏の本願から見れば、仏の真意は、定・散の諸行を勧めるのではなく、ひとえに念仏を称えさせようとするのだ。だから、釈尊は、念仏を阿難に付属して廻代に流通させようとした、というこの『観經疏』の一文は、善導大師の『観經』観

を端的に表わしています。観經觀を表わしているばかりでなく、念仏中心の仏教觀を明示しています。

諸行のなかで、念仏だけが永遠に流伝するとか、仏の説教の真意は念仏を説くことにあった、とかいうのは、いうまでもなく念仏を中心にした仏教觀です。經典にいう廻代とか末世とは、經典の教えを信受する側から見れば、いつの時代にあつても、いまの世、現代、のことに他ならないでしょう。現代の人々にとって、現代人とはいかなるものか。その人々にとって仏教のなかで必要なものはなにか。もつとも大切な教えはなにか。仏教の根本趣旨はなにか。この答えを求めて苦悶と努力を積めた法然上人は、善導大師の『観經疏』を依拠として、仏教の根法に念仏をさぐりあて、念仏中心の仏教觀を確立したのです。

『観經』の經文とその善導大師の注釈を挙げたあとに、上人みずからの見解を述べるいわゆる私釈段が続いています。私釈段では、左の『観經疏』の文句を詳細に注釈しています。とくに、定・散二善の問題をくわしく解説し、解説しながら念仏と比較し念仏の優秀性を顕揚しています。

定善とは、太陽や水や樹など一つの対象に想いを集中し、靜かに觀想にひたる禪觀的实践を意味し、『観經』に説く、
1 日想觀、2 水想觀、3 地想觀、4 宝樹觀、5 宝池觀、6 宝

樓閣觀、7華座觀、8像想觀、9阿弥陀仏觀、10觀音觀、11勢至觀、12普往生觀、13雜想觀です。

散善とは、觀想にひたらずに行なう実践行のことで三福と九品をいいます。三福とは、1父母に孝養し、師長に奉持し、慈悲の心をもって殺生しない、十善業を修する（世福）。2仏法僧に帰依し、戒をたもち、威儀を犯さない（戒福）。3菩提心を發し、深く因果の道理を信じ、大乘經典を誦誦し、行為に定散の諸行や念仏を勧める（行福）。以上の三種の実践です。九品は、三福をさらに九種に分類したもので内容的には三福とかわりません。

法然上人は、定・散の諸行を詳説していますが、定・散諸行を詳説した理由は、念仏がいかなる行より勝ることをあきらかにするためである。諸行を比較の対象として示さなかったならば念仏がいかに勝れているかということがわからないからであり、諸行は廃捨するために説き、念仏は立てるために説いた、と述べています。ここに念仏と諸行の二者択一の立場を明確にしています。この章が念仏諸行廃立篇と名づけられるゆえんはここにあります。

各宗派では、それぞれの実践行を立てています。そうした諸行と念仏の相互関係をいかに理解したらよいか。往生を達成するために諸行をすべて捨て去って念仏だけを実践すれば

よいのか。諸行も必要であるか否か。この念仏と諸行の問題は『選択集』で重要なテーマです。第四章では、念仏と諸行の關係に助正と傍正と廃立の三つの説があることを示しています。この問題は、第四章の解説にくわしいのでそれを御参照下さい。この章では、第四章と比べると、諸行を念仏の補助的な行として意味づける助・正、傍・正の説が示されていないで、諸行を廃捨する廃立の立場を強調しているのが特長といえます。

しかし、そうはいっても、定散二善について解説しているなかに、定散諸行のそれぞれについて、「たとへ余の行なしといえども、……をもって往生とするなり」という説明が見え、上人が、念仏以外の諸行は往生の達成のために益がないというわけではありません。諸行はそれぞれ価値はあるが、諸行は本願に裏づけられたものでないから自分は諸行を取らず、本願である念仏を選び取る、というのです。阿弥陀仏の本願であるか否かが廃立説の根拠になっています。

ところで、菩提心は、仏道に志する者がまず発すべきもので、伝統的に、広く仏教者の間で重視されています。当時のいわゆる旧仏教側の人々は、その菩提心を法然上人が廃捨し

たと見做して、上人を厳しく批難しました。上人の定散二善の仏教分類法では、菩提心は散善のなかに入ります。上人は、とくにこの一章で菩提心と念仏の関係について論じています。上人が、菩提心をどのように理解したか、旧仏教側が批難するように実際に菩提心を捨てたか否かには、多くの議論と研究があります。法然上人が菩提心を廃捨したか否かは菩提心の内容にかかわる問題でしょう。旧来の仏教で定義する難解な菩提心はたしかに捨てたでしょう。しかし、本章では、各宗にそれぞれ菩提心があり、宗によって内容が違う、と述べていますし、『三部経釈』では、浄土宗の菩提心を「浄土に往生したいと願う心」と説明しています。上人は、旧来の菩提心を捨てて、この浄土宗の菩提心を立てたと解するのが妥当でしょう。

また、本章では、往生を求める人は、「たとへ余行なしといえども、菩提心をもって、往生の業となす」と自宗の菩提心を発することを勧めています。けれども、上人は、菩提心をはじめ持戒・解第一義の行（仏教の真理をさとる行）・読誦大乘など四箇の行を重視するあまり、念仏を抑えてはならない、とはつきりいましています。この章に述べている念仏

と菩提心の考えかたには、菩提心は往生の原因にはなるが、菩提心を重視するあまり念仏をさまたげてはならない。念仏は本願によって選ばれた教えであり菩提心はそうではない、だから念仏の方が菩提心より勝れている、という上人の趣旨が窺えます。上人が菩提心を否定しないけれども菩提心より念仏を重視していることだけは明瞭です。法然上人以後の浄土門徒にとってこの考えかたは容易に受けとめることができ、上人の当時にあっては、念仏が菩提心より勝ると価値づける見解は、画期的な新説であったわけです。これだけでも旧仏教から批判される要素はあったでしょう。

以上のように、この章では、念仏の付属の問題を主題としながら、それに関連して、念仏と定散の諸行との関係をつきつめ、とくに、念仏と菩提心の問題にも言及しています。そして、そういった問題に関連するのは、なにゆえに積尊が念仏だけを弟子に付属し後世に流通せしめんとしたかという理由を明確にするためでもあるのです。

いまは、積尊の時代を去ることと交代は勿論ですが、また法然上人を去ることもまさしく交代です。しかし、今日なお念仏はその交代に流通しています。この事実を考えながら、この付属仏名篇を読むとあらためて感銘がわいてきます。



塩飽の島などへの道

高橋良和

香川県には法然上人の流罪の際の遺跡が割合に残っている。仏生山法然寺のことはすでに前に記しているので省略するが、その他に専称寺、西念寺も縁りのところである。

法然上人の四国流罪の期間は短いので、わずかに四月である。はじめ土佐の国に赴くことになっていたのが、途中で九条兼実の計いで自分の所有地である讃岐に変更されたのであって、滞在は子松庄の生福寺であり、その後兵火で生福寺が焼けたため、再興したのが仏生山法然寺であるという。

その子松の生福寺に到着するまでの間に、上人を乗せた船は大坂からまず一番についたのが、塩飽島の専称寺である。塩飽島は丸亀の向うの島である。そうであるから四国から赴くことになる、丸亀から汽船である。本島についてから歩いて二十分ほどのところである。山陽線で赴くと、岡山県から宇野線に乗り茶屋駅から下津井電鉄に乗って、その下津井から丸亀行きの船で、本島に下船すれば

よい。そしていづれからも下船後二十分である。

この塩飽島に法然上人がついたのは三月二十六日のことであった。暖い瀬戸内の島ではあるが、まだ早春で花もつぼみをふくらませようと、春風を待っていたような感じである。

ここでは土地の地頭である駿河権守高階保遠西忍がいた。

ある夜の夢に満月の光が自分の袂に宿るというのをみて、非常に不思議に思い、何事かが起こると思っていたところ、法然上人がこの島に到着したので、西忍は非常に感激して接待したことを寺伝はつたえている。

そこで西忍はまず旅情をなぐさめようというので、薬湯を設け、その上御馳走をつくって接待したのである。

法然上人は非常によろこんで

接待をこの島でうけようとは思わなかった。仏さまの極楽もこのようなたのしいところでありましょう。お互に早く阿弥陀仏の

極楽に生れることをねがいたいものです。

と話をしたことから、この西忍は非常に感激したので、そのあと自分の館を寺にしたのがこの専称寺であるということである。

この島で法然上人は歌を詠んでいる。

極楽もかくやあらましあらたのし

はやまいらばや南無阿弥仏というのである。上人の説法を聞いてよるこぶ地頭高階西忍のすがたと、四国の流罪を朝恩とうけとつて、念仏弘通の旅に出た法然上人との出合いの風景がわかるような気がする。

そればかりではない。法然上人がこの島から更に子松庄の生福寺に赴くときである。

おそらくこの塩飽島の滞在は数日であつたのではないかと思うが、それでも島の人たちは、この法然上人に別れを惜しんでこの西忍の館に上人の説法を求めてきている。

人情伝のごくすくなつた昨今では、まるで夢のようなことである。

どうかこの島におとどまりください。

と頼みただけで、もとより天皇の命による四国流罪であるから変更も出来ず浜辺に別れを惜しんで見送る島の人たちをみると、法然上人はそこにあつた波うちぎわの小石を拾つて、それに名号を書いたのである。ほんとうに小さい石であるが、名号の文字ははっきり読むことが出来る。

これを「爪形名号石」と称して、この寺の什宝として今日残っている。

この塩飽島から子松庄へ、その間丸亀から陸路であつたようで、丸亀市の塩屋權堀、そして善通寺、宮田を経て子松庄についている。

その子松庄の生福寺が仏生山法然寺として再建されたあとに一寺を残したのが福間の西念寺という寺である。

この寺は高松駅から琴電に乗つて、羽間駅で下車すれば五、六分のところに寺がある。詳しくは香川県仲多度郡満濃町という。このあたりは京都に似ているし、おそらく上人はここで京都を思い出したことであろう。

珍しいのはここに法然水という小さな井戸が今も残っている。豆腐のすきであつた法然上人が、この井戸の水で豆腐をつくつてさしあげたといういわれがある。

これが子松の生福寺のあとであつて、このあたりにくると、一木一草が法然上人の心をとらえたことと思うし、二十五霊場巡拝の際はこの羽間の西念寺に足を運んで欲しい。

法然水でつくる豆腐は今日ではもうものがたりに残っているだけであるが、上人と村人たちの美しい話として心があたたまる。

この西念寺にはお堂の前の饨ヶ淵の水で髪をうつして画いたという草履をはいた法然上人の像がある。

素朴な感じではあるが、苦難の様子がわかるようである。

阿弥陀二十五菩薩来迎図

比叡山横川の行院に行く機会があったのは二三年前であつたが、横川の雄大な山々の重なり、太陽が沈むのをみた時、私は一種の感動を覚えた。それは絵画でしか見たことがなかった山越の弥陀の相を現実に見たような気がしたからである。それは比叡山という現地という觀念からそう思ったのかも知れない。大原の三千院の阿弥陀堂なども背には山があり、そうした感動はあつたけれど横川でのそれとは大差があつた。

死後浄土に生れたいと願う気持は誰れもが持つていよう。臨終間近のものにとつて阿弥陀仏の来迎がどれほどのものであるかは、過去の往生伝や記録が充分に語ってくれる。その切実さなどが、大阿弥陀経や観経に記されている表現でなくして現実絵画という方法であらわされるようになったのかも知れない。臨終になればかならず阿弥陀仏が来迎される。そして浄土に生れたいと願う人にとって、西方極楽より雲に乗つたこの世にあらわれる阿弥陀仏ほど崇敬できるものはない。そうしたわけで来迎図や浄土曼荼羅図が流布したのであ

らう。

来迎図は正式には阿弥陀来迎図といい、多くの侍者や二十五菩薩などを従えているが、一応九品阿弥陀来迎図、阿弥陀二十五菩薩来迎図、阿弥陀三尊来迎図、同一尊来迎図などにその図相は区別できよう。こうしたものは古くインド、中国にみられるが、日本において二十五菩薩来迎図は源信の創意によるとされているが、高野山のそれをはじめとして、大和興福院・越前安養寺・近江来迎寺・同安楽律院・同新知恩院・備前遍明院・摂津小童寺・京都知恩院・同浄福寺などがある。やはり平安中期から鎌倉にかけて盛行したことがわからう。

知恩院所蔵のこの来迎図は普通早来迎（はやらいごう）といわれているもので、絵をみてもわかるが聖衆の乗った雲にスピード感がある。これは高野山の二十五菩薩来迎図などかなりちがっている。この成立は鎌倉中期といわれているが、平安期のものとはちがってかなり写実的ともいえる。より早く、より現実的というところがこうしたダイナミックな図法となつたのである。さらに菩薩が手にしている楽器から見るものにとっては立体的に音があらわれて、大オーケストラの様呈もしている。こうした雄大さと主体的な構成が注目されるわけである。

（田中祥雄）



一 阿弥陀二十五菩薩来迎図 一 (国宝)

京都 知恩院所藏

「浄土」購読規定

一部 定価 百三十円
(送料十二円)

会費一カ年金一、五〇〇円
(送料 不要)

浄土 二月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和四十九年一月二十五日 印刷
昭和四十九年二月一日 発行

定価 百三十円

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇二 振替東京八二一八七番

弊会発行の恒例教化トラクト

『ひがん会』 春季号

新書判・表紙共 12 頁

定価 一部 18 円 (200 部以上 16 円)

送料・実費

“お彼岸の施本には好適です”

諸経費高騰の折から、今般価格は多少値上げさせて頂きました。
お早めにご注文を頂けますれば幸甚です。

浄土宗開宗八百年記念トラクト

『法然上人と浄土宗』

B6判 96頁 定価 250 円 (〒 70円)

(200部以上 単価230 円 送料実費)

内 容

第一編 法然上人のあゆみ

第二編 浄土宗のおしえ

第三編 信徒の心得

附 法然上人略年譜・参考文献

間もなく開宗八百年の聖辰を迎えます。本会ではこの慶祝を期しトラクトを作成いたしました。檀信徒用施本・慶讃法要記念品などとして広くご利用下さい。

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262-5944 番